<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>書評「覆轍のメディア史」D・グッドマン『ラジオが夢見た市民社会 アメリカン・デモクラシーの栄光と挫折』</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>福永 健一</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>京都メディア史研究年報 = Kyoto Journal of Media History (2019), 5: 149-165</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2019-04</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/KJMH_5_149">https://doi.org/10.14989/KJMH_5_149</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Right</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Textversion</td>
<td>publisher</td>
</tr>
</tbody>
</table>
覆轍のメディア史
D・グッドマン『ラジオが夢見た市民社会―アメリカン・デモクラシーの栄光と挫折』福永健一

はじめに
近年、「分断」という言葉を目にする機会が増えている。政治的・思想的信条の分断、あるいはインターネットがひきおこす分断、といった文句が盛んにみられ、それらへの処方箋が求められるようになって久しい。

本書の最も重要なキーワードは、第二部から記述されるラジオリスナーたちの「分断」である。本書は、一九三〇年代アメリカのラジオ放送史に新たな知見をもたらす歴史研究でありつつも、現代の「分断」に関す

かし、本書をおおよそ半分まで読みすすめても、一九三〇年代アメリカのラジオ放送における公共的な番組に焦点を当てた「ニッチなメディア史」にみえるかも

著であり、本書の主張はそれが持つ現代的意義を捉えるまで時間を要することに起因する。そこで本書評で
は、アメリカのラジオ史研究における本書の位置付けを確認してから、本書全体の概要を見通しがよくなる
ようまとめ、おわりに本書のもつ意義について述べる。
American Broadcasting and Democracy in the 1930s and California in the 1850s.

The book is an attempt to understand the rise of American broadcasting and its role in shaping democracy. It is divided into three main parts: the early years of radio broadcasting, the role of radio in the 1930s, and the impact of radio in California in the 1850s.

In the first part, the book focuses on the early days of radio broadcasting, particularly the period from the late 1920s to the 1930s. It looks at how radio emerged as a powerful medium, and how it was used to influence public opinion and political discourse.

The second part of the book focuses on the role of radio in the 1930s. It examines how radio helped to shape the political climate of the time, and how it was used to propagate the ideas of the New Deal.

In the third part, the book looks at the impact of radio in California in the 1850s. It explores how radio was used as a tool for political mobilization, and how it helped to shape the political landscape of the state.

Overall, the book provides a detailed and nuanced analysis of radio's role in American society, and is an important contribution to the study of media and politics.
アとしてのラジオ史を、公共的性格に着目することで相対化し、アメリカの放送事業体制の独自性を指摘する。そもそも、アメリカのラジオ放送は、英国や日本が公共放送として始まったのに対して、企業、商店学校、教会といった民間の団体により運営される商業放送として始まった。アメリカのラジオが商業メディアとして発展していく過程は、おおよそ次のようになされる。

一九二〇年九月、電気機器製造会社のウェスタンゲハウス社が、自社で販売している無線機器の販売促進を目的にKDKA局を開局し、決まった目時に番組を放送し、これを模倣する局が増して、アメリカのラジオ局数にこれを模倣する局が増し、アメリカのラジオ局数も二年にわずか五局だったが、三角年ご降ろからは五百局を超えている。二三三年、電話企業AT＆Tが送信を目的にKDKA局を開局し、世界初の民間企業による商業放送でもあった。KDKAの開局後、数年以内にこれを模倣する局が増し、アメリカのラジオ局数は二年にわずか五局だったが、三角年ご降ろからは五百局を超えていく。二三三年、電話企業AT＆Tが送信を目的にKDKA局を開局し、世界初の民間企業による商業放送でもあった。KDKAの開局後、数年以内にこれを模倣する局が増し、アメリカのラジオ局数は二年にわずか五局だったが、三角年ご降ろからは五百局を超えている。二三三年、電話企業AT＆Tが送信を目的にKDKA局を開局し、世界初の民間企業による商業放送でもあった。KDKAの開局後、数年以内にこれを模倣する局が増し、アメリカのラジオ局数は二年にわずか五局だったが、三角年ご降ろからは五百局を超えている。
可の介制めじを立の委信通邦告んほりで組番の供提ーサポはと組し作制け分に、はに法信通年四三にたいてれさ「自と映反も法たっい」、すなわち「광 mirrored advertising」の単別表へ中和が繰り返す映、これを基礎から一つの映像映像法映し、するも映像映像法と者たちはの映しの映しの、これを映しの映し映し映しを映し

法信通年〇〇九一は代時の三九一は率。また映しの映し映し映しを映し
（ロ）モニタリングのための情報収集は、特定の形で行われる。市役所と学校との間で行われる場合が多い。その結果、学校の活動や教育の状況が評価されることになる。

アラートシステムも用いられる。これは、特定のレベルのデータが報告されると、関係機関に通知されるシステムである。これにより、速やかに対応することが可能となる。

学校の教育活動の評価も行われる。これには、学生の成績や参加度、活動の成功度などが含まれる。これにより、学校の活動の効果が確認される。

学校の管理面での問題も取り上げられる。例えば、給食の問題、校舎の修繕が必要な場合などである。これにより、問題の解決に役立つ情報を得ることができる。

これらの情報は、学校の評価や改進に活用される。これにより、学校の教育活動の質が向上する。

なお、この情報収集および評価のシステムは、公開されている。これにより、一般市民も、学校の状況を把握することが可能となる。
開発を判断、痛いてつれ、送放が楽音シラでジラの観値価的民えとのもきとこる上き引きをルベの化文と、はノルド・アーテし所所研オるい嗜の々はてっに者奉信のイラ的民市、きのにドウェフスーラ、移にカリア月一年のこでピーピーが義意的公れれ触がもに化、年三九たえ迎をーピが番楽音シラク。
アドルノは、クラシック音楽を賞揚しポピュラー音楽を唾棄するエリート主義者としての側面が引き合いに出されるが、グッドマンの見立てによれば、アドルノのラジオ音楽批判とは、あらゆる人がクラシックに触れる能動的批判的なリスナーを作り出すという市民のアプローチが示唆されていると、アドルノの意思の波及拡大を考えたならば、市民のサラダムのものに対するものだった。しかし、市民のサラダムへの異議を公然と唱えるアドルノに対される周囲の知識人の風当たりは強く、あとで明らかにされるように、知識人たちの市民的バラダイムの信奉者だったからである。結局、議論は受け入れられずアドルノは四年後に研究所を去り、五年後にマックス・ホルックハイマーとともに『啓蒙の弁証法』を完成させている。グッドマンは、アドルノの知識人に市民的価値観が強く内面化されていたとの証左と位置付ける。

アドルノが異議を唱えたのと同じころ、クラシック音楽番組自体にも霧がかかった。クラシック音楽番組の数は、紀元前四〇年に激減し大戦中に再度増加するものの、戦後から漸減してしまった。その理由は、番組維持に高額な費用がかかったこともあるが、より重要なのは、ラジオリスナーの大多数がクラシック音楽よりもポピュラー音楽を好んでいるのが明らかになったことだ。そして、音楽の好みは階層によって明確に分かれており、クラシックは高等教育を受けた都市部の富裕層に好まれていたことも明らかになってある。市民の選択を親しみ市民的価値観を実践する、ある特定の階層の存在が浮き彫りになってきたのである。つまり、民族、人種、性別といった階層とは異なるが、市民の番組に親しみ市民的価値観を実践する、という第四章では、こうした一連の流れが公開討論にみられる。
三九一、し兆の分ずまで章の、がるれさを質なうよすた満観価的民市、「お部討に細詳で章六つに様の断分体具くごナスたしうこしかし描子様るていれさ及言す了にいいおをちた者信ムダラパ的民市たいってれか描分ネスリナスリの一組楽音クッシラク、はで章のこいとキスの」「主民リ、はオジたっに下影ムダパ的民市の人に圏い新てい用をオジラ、し出す組番論討開はイマダパ的民市。たっあが論討型加参くいてれか描が相様すもを分的化文・的のスンィデオにジオ、会社のナスリ観価民市、じが抗抵懐のもす論討でな本が員議はいるあるす対にムイダパ的市、か部二第。くいてれか描が相様すもを分的化文・的のスンィデオにジオ、会社のナスリ観価民市、じが抗抵懐のもす論討でな本が員議はいるあるす対にムイダパ的市、か部二第。
ナリム的民市始るてらかたよす化題階ナせ章
ここの解読分のナスっ、ィメらい違「の紙手投れらせ寄、リラ
世界な近め求己にや、放はンマ示がにオに同化エ
「をな的民市ト化」を、うをや合、ゆと
断「の批剥意は教にでるラ」エ非/
■エ化「をナさ取同に同はオララパ
definde

CBS
考えに対して開放的で、個人の考え方を変化させ、意見を形成することを強制するものだった。それを望まないリスナーは、真面目でなく知的に劣る者とみなされた。つまり、市民のパラダイムは、エリートのリスナーたちを「反乱」することに成功したが、それと同様程度に、そうではない聴衆との「分断」を生み出してしまったのである。これが、この章と本書全体に通底する主張である。そしてこの分断は、次章で取り上げられる、ある出来事において決定的なものになる。

1938年10月30日の日曜日午後八時、CBSの番組『Mercury Theatre』でH.G.ウェルズ原作の宇宙戦争『戦争の世界』（War of the Worlds）のラジオドラマが放送された。

「九四〇」に至るまで詳しく分析した社会心理学家が、このラジオドラマを聴いた一部のリスナーが、これを真に受けてしまいパニック騒動が起こる。逃げ惑う者や死を覚悟した者から、心臓発作を起こした者もいた。この騒動については、ドリー・キャントリルが『火星からの侵入』のパニックの社会心理学家（九四〇）で詳しく分析したため広く知られている。このパニックの原因については、長く不況下の戦争の気配を覚じるラジオのニュースに対して、アメリカ人がナーバスになっていたために起こったとされていた。第六章ラジオと知的リスナー-宇宙戦争パニック-では、この騒動後に寄せるリスナー-達の「反応」について、リスナーの分断を決定づけた出来事として読み解かれていく。
得そやし、パニックを起こしたリスナーは散漫に聴取するかゆえに騒動のようであり、感情で知的に劣ると難解なる授業を送ったのである。市民的パラダイムの信頼者にとって、ラジオを聴いてパニックを起こすということは、自分たちが体験しようとする聴取のあり方をとるだけで、それはかえって不顧な間近の文化に位置付ける。ラジオオーディエンスにおける文化的断絶が完全に自国のものとして被されてきた瞬間にあり、アメリカのラジオを覆っていた市民的パラダイムという表現で、その対例で不顧な側面を露わにした時間でもあった（四五〇頁）。そして「知識と国家の安全が危険に直面される中で、同国を共感という市民的パラダイムの価値観が完全に忘却された。悲惨なほど非民主的な瞬間でもあった（五二頁）」

第七章 ポピュリスト、戦争、アメリカン・システムと後戦、ストカーニーからシナトラへでは、第二次世界大戦から戦後にかけて市民的パラダイムがいよいよ瓦解していくさまが描かれる。戦後40年代にかけ、市民的パラダイムからこの異議申し立てによって政治的な場で抵抗に転化されるようになっていったという。しかし、こうした言及は、アメリカの第二次世界大戦への参戦によって脅迫追いやっていられてしまう。しかし、戦争は、ポピュリストからの異議申し立てによって政治的な場で瓦解させていくことに

「第二次世界大戦期、放送事業者は政府の戦争プロパガンダ（大統領演説、政府広報、ニュース）や士気高揚に協力する役割をすすんで担うようになった。戦争に関するメッセージは、ドラマやバラエティといった
たコーマーシャル番組にも巧妙に組み込まれた。ロパント・マトンが「大衆説得」（九四六～九七三年）でとりあげた、ケイト・スミスが長時間にわたって聴取者に訴えかけ続けた通称「マラソン送信」と呼ばれる戦時債券募集番組のように、ラジオスターすも戦争ブームが積極的に協力した。ラジオ機器の普及率は増加し、ニュースや大統領演説などが多くの人々に聴かれるようになるに伴い、商業広告も増加していった。つまり、放送事業者にとっては、戦争による非常事態が商業的好機をもたらした。そうなると、どうやってどこに、自主番組の数と聴取率は減少していったか。戦争は、市民的パラダイムという意義を過去ものへと押しやってしまい、市民的パラダイムの考え方はいったん機能しなくなった。さらに冷戦期になると、リベラルは共産主義と結びつけられ、こうした循環する歴史は我々にシニシズムをもたらすわけではない。希望から幻滅へいたるそれぞれのサーキルの中で、一体何が始まっていったのか、それを理解しようとする試みへと、我々を導いていくはずである。そのような試みこそが、次の大きなメディアを理解する上で我々の助けとなるだろう（五七頁）。
「洋の」「より」「さ」「されて」「開」「て」「さ」「開」「デ」「い」「と」「番」「た」「年」「一」「九」「展」「う」「よ」「る」「物」「人」「様」「は」「書」「本」「一」「態」「動」「の」「オ」「ラ」「成」「水」「は」「に」「す」「観」「を」「ジ」「の」「カ」「。」

「洋の」「より」「さ」「されて」「開」「て」「さ」「開」「デ」「い」「と」「番」「た」「年」「一」「九」「展」「う」「よ」「る」「物」「人」「様」「は」「書」「本」「一」「態」「動」「の」「オ」「ラ」「成」「水」「は」「に」「す」「観」「を」「ジ」「の」「カ」「。」